

## 座長のまとめ(13~15)

鴨井 逸馬

3 演題は肝シンチグラフィに関するもので、熊大・広田は、肝内転移巣検出の際、時折出くわす転移巣以外の原因(偽陽性例)の検討を行なった。胆道系の異常が高い割合を占めていた。鹿大・城野は、乳房、肋骨、腎による欠損所見について分析を行なった。立位あるいは臥位での所見の違いによる肝内腫瘍の検出能について Discussion が行なわれた。得られる検出能とそれが得られるために払われる時間・努力・経済性も考慮し、検出効率の良いこともスクリーニング検査として必要な条件であろう。久大・仏坂は、肝腫瘍の検出に対する肝シンチ・エコーによる比較が行なわれた。この演題に対しても両検査の長所、短所を熟知し、高い診断能を得ることと効率のよいことが望まれた。

16. New T<sub>3</sub>, T<sub>4</sub> RIA kit の使用経験

吉井 弘文 片山 健志 (熊大・放)

RCC(科研)より、新たに発売された T<sub>3</sub>, T<sub>4</sub> RIA Kit の基礎的検討を行なった。

Intraassay 8% 以下, Interassay 10% 以下, 回収率は 84.2~115.2% で, T<sub>3</sub>, T<sub>4</sub> 共に, 同様の値を示した。Incubate 温度についてみると, T<sub>3</sub> で 37~45°C, T<sub>4</sub> で 24~37°C で得られた値に大差は認めなかったが, 標準曲線は, 温度が下がるにつれて平坦化した。Incubation 時は T<sub>3</sub> で 45~90 分, T<sub>4</sub> で 45~60 分は同じ値を示した。

80 例による Euthyroid の平均値は, T<sub>3</sub> 1.4±0.4 (ng/ml), T<sub>4</sub> 8.4±1.9 (μg/dl), 従来の RIA PAC との相関は, それぞれ  $y=1.13x-0.06$   $r=0.97$ ,  $y=1.04x+0.14$   $r=0.98$  と, ほとんど一致した。

17. <sup>99m</sup>Tc-pertechnetate による甲状腺摂取率とシンチグラフィ

門前 芳夫 福田 俊夫 中島 彰久  
本保善一郎 (長崎大・放)  
山村 治夫 田川 文夫 (同・放部)  
山下 俊一 和泉 元衛 (同・1 内)

今回, われわれは <sup>123</sup>I や <sup>131</sup>I にかわるものとして被曝量が少なく, ヨード制限食の不必要な <sup>99m</sup>Tc-pertechnetate による甲状腺機能検査およびシンチグラフィについて検討した。

甲状腺機能検査に関して, 対象を 50 名 (hyperthyroidism 13 人, hypothyroidism 6 人, chronic thyroiditis 11 人, euthyroid 群 10 人) とし, 方法は, Massachusetts 大学 P.B. Schneider の方式に準じ, <sup>99m</sup>TcO<sub>4</sub><sup>-</sup> 2~4 mCi 静注後, 2', 10', 15' に頸部で, 15' に大腿部で <sup>99m</sup>Tc-uptake を測定し, 頸部の 10'/2' および 15' の頸部/大腿部の比を正常者と比較した。その結果, 正常者 (euthyroid 群) では, 15' Neck/thigh ratio は, 3.5~4.9, Neck 10'/2' ratio は, 0.9~1.1 となった。また, hyperthyroidism では, 15' Neck/thigh は, 4.9 より大となった。しかし, hypothyroidism および chronic thyroiditis では, 明らかな有意差を得られなかった。シンチグラムについては, <sup>99m</sup>Tc と <sup>123</sup>I または <sup>131</sup>I の両方を使用した 55 人について検討した。検討した結果, <sup>99m</sup>Tc シンチグラムは, <sup>131</sup>I と同程度の情報が得られる。ただし一部の疾患では <sup>99m</sup>Tc と <sup>131</sup>I で不一致の所見を示す可能性があるので注意が必要である。

18. <sup>201</sup>TlCl 甲状腺陽性病変の経時的検討  
——悪性, 良性の鑑別能に関して

中條 政敬 坂田 博道 城野 和雄  
篠原 慎治 (鹿大・放)

<sup>201</sup>TlCl 甲状腺陽性病変の経時的变化による良・悪性の鑑別能を検討した。方法は, <sup>201</sup>Tl 静注 60 分後像における病変部とそれ以外の甲状腺部との相対的集積度が 5 分後像のそれと比較し, 不変か, 増強, 低下するかに分けて行なった。

その結果, 悪性甲状腺腫 34 病変では不変 17, 増強 12, 低下 5 で, 甲状腺腫 35 病変では不変 15, 増強 3, 低下 17 であった。従って, 腫瘍病変では増強病変 (80%) は悪性の, 低下病変 (77%) は良性の可能性が高いことが示された。また, 慢性甲状腺炎の 8 病変はすべて不変であった。さらに 60 分後像で病変部の集積がそれ以外の甲状腺部に比し高い病変は 85% (11/13) が悪性, 低い病変は 100% (19/19) が良性であり, 60 分後像で同程度以外の集積を示した場合も良・悪性の鑑別に有用と考えられた。不変病変 [腫瘍で 46% (32/69), 慢性甲状腺炎 100% (8/8)] が 60 分目以降の撮像で相対的集積度に差を生じ, 良・悪性の鑑別に寄与するか否かは今後の検討を要する。